梨木香歩『裏庭』に見られるテルミィの「傷」の変容

田　中　雅　史

は　じ　め　に

梨木香歩の『裏庭』では，主人公の照美の内的な感情の動きを「裏庭」という特殊な舞台を通して浮き彫りにしている。照美の感情生活の核心部分には，家族の状況から生じる癒されない喪失感と愛情の渇望がある。それをこの話では「傷」という言葉でしばしば表現し，それとどう向き合っていったらよいかが探求される。この論文では話の流れを追いながら，「傷」の変容がどのようなイメージで表現されているかを考えていきたい。

1　照美の置かれている状況

『裏庭』はバーンズ屋敷の話から始まる。バーンス屋敷はかつて英国人の一家が別荘として使っていて，その後空き屋になって荒れ放題の屋敷である。その一家にはレイチェルとレベッカという娘がいた。

バーンズ屋敷には「裏庭」があるという話を，照美は友人である綾子の祖父の丈次から聞く。丈二は子どもの頃，レイチェルの友達だった。その「裏庭」は普通の庭ではない。バーンズ屋敷には庭があるが，それは奥庭と呼ばれ，裏庭へは鏡を通ってしか行けない。レイチェルの一家は代々，裏庭を丹精してきた一家である。皆が裏庭に行けるわけではない。一世代に一人，裏庭の世話をする庭師に宿命づけられた者が出てくるのだが，その人はからだが弱いことが多く，それは裏庭にエネルギーを吸い取られるからだ，裏庭は死の世界にとても近いからだ，とレイチェルは丈二に話す。レイチェルはだから裏庭は嫌いだと言う。レベッカは当時，裏庭にしばしば出入りして，何かを育て始めていた。その行動はうまくいけば何かすばらしいことをもたらしたかもしれないが，後述する理由により，悲劇的な結末を生む。

丈次もレイチェルと一緒に裏庭へ入りかけた経験をもっていて，現在では孫の綾子の友人である照美のいい話し相手になっている。主人公の照美の両親はレストランを共働きで経営していて，いつも夜遅く帰るので，照美は寂しさを感じている。丈二との会話は，それを埋めてくれるものだった。

照美には純という軽い知恵遅れの弟がいたが，石垣の穴を通ってバーンズ屋敷の裏庭にはいり，池にはまったのがもとで亡くなる。照美はいなくなった純の使っていたものが残っていることに対して，「人が死ぬって，不思議な感じだ。」という感想を持つ。ここでは照美の感情の基調となっている，喪失感が表現されていると思う。

照美の母の幸江は文中で「さっちゃん」と呼ばれているので，この論文でもそう呼ぼうと思う。照美が両親との関係で寂しさを抱えていたのと同じように，さっちゃんはさっちゃんの母親である妙さんとの間で，同じような感情を経験していた。さっちゃんには妙さんが「厳しくて，皮肉屋で，人の揚げ足ばかりとる」（27）人だと感じられた。妙さんが亡くなったときも，さっちゃんは「悲しいという実感がなかなか湧いてこなかった」（30），そのことが悲しくて泣いたという。ただ，妙さんが女の子が生まれたら名前を照美とつけてほしいと言ったことは覚えていて，それで娘の名前を照美にしたのだ。

照美の父は，照美の顔を「あっちこっちの親類縁者から部品をよせあつめたような顔」（31）だと感じている。母親のさっちゃんは，働くのが忙しくて娘に感心を向ける余裕がない。そんな両親に対して，綾子のおじいさんは照美に「ちょうどいいくらいの関心のはらいかた」（32）をしてくれると照美は思っていた。

ウィニコットは幼児に対する母親のありかたとして，「ほどよい母親」good enough mother というものがよいとした。それは「完全な母親」でも「外傷的な母親」でもない，微細な共感不全を与えつつもそれを「抱えること」によって処置し，そのことで幼児と母親とのほどよい分離を進める母親である。

養育者による必要な「映し返し」mirroring 体験が不足している照美に対し，丈二は感情的に重要な他者

としてそれを補う位置にあったと言えるだろう。したがって，その丈二おじいさんが脳溢血で倒れたと聞いたとき照美が「一瞬心臓が止まりかけたよう」に思うほどショックを受けたのは当然である。そんな重要な人物の喪失の危機と，バーンズ屋敷が宅地にされるという喪失の危機が一度にくるのである。

照美は混乱の中でバーンズ屋敷の奥庭に行ってみる。そして，昔のことを思いだす。昔はママはもっと優しかった。パパは役に立つと言ってくれた。だが，純が奥庭の池に落ちたのがもとで死んだ後は，両親はあまり自分を気にかけなくなった。もしかしたら両親は自分を許していないのか（41）と照美は考える。

照美は自分を消してしまいたいような気持ち（44）になる。照美の置かれている状況は必要なケアが不足しているという意味で，いわゆる「機能不全家族」ということもでき，そうすると照美はアダルト・チルドレン（AC）である。さっちゃんも妙さんのケアをあまり受けていないので，次世代 AC とも言える。AC は自分の価値に自信がなく，マイナスイメージを自分に対して持ちやすいが，照美も自分を否定するような感情を現実世界でも裏庭の旅でもしばしば感じるところに特徴がある。

しかし，照美にとってバーンズ屋敷の裏庭という超自然的な場所が，一種のカウンセリングの場所のようになっていく。ここでも自己否定的な感情を抱いた照美は，同時にバーンズ屋敷のドアが開くというふとした確信を抱き，ドアは予想通り開く。バーンズ屋敷の内部で，照美は何かが注目している感じを持つ。不安な感じだが，おじいさんもここに来たんだと考えて元気を出す。

おじいさんから聞いていたバーンズ屋敷の鏡が，照美に「フーアーユー？」と問いかける。照美が一語一語区切るように「テ・ル・ミィ」と答えると，それを Tell me. と認識した鏡は，「アイル・テル・ユウ」と答え，裏庭への道が開く。もともとの生育過程で自分というものが不安定で，直面する喪失感から自分を見失いかけていた照美に，裏庭は「あなたが何者であるか教える」というのである。

照美という名前は妙さんがつけるように言ったものだ。そのおかげで照美は裏庭に行けたのだ。つまり，祖母の妙さんは，照美に裏庭に行ってもらいたくて，それを準備したと考えられる。照美は突然出てきた霧の中を，おかっぱ頭の少女，彼女は実は祖母の妙さんであることが最後にわかるのだが，その後について裏庭の世界にはいっていく。

2　裏　　庭

貸衣装屋

舞台が裏庭に移ると，本のフォントが変わる。目に見える形で異世界を表現しているわけである。照美の名前もテルミィと表記される。

裏庭では礼砲が，どーんという花火を打ち上げるような音で鳴っている。それは崩壊を促す音であると後でスナッフから説明される。テルミィは透明な化石となった竜の骨の解体作業をしている人たちを見るが，解体された竜の頭骨は見る間に飛び去ってしまった。

水のない川で釣りをしている人がいて，テルミィは話しかける。スナフキンに似ているのでスナッフという名前で呼ぶことになる。スナッフは，テルミィが元の世界に帰るためには，竜の骨を元に戻す必要があるという。

テルミィはスナッフの案内で貸衣装屋に行く。カラダ・メナーンダとソレデ・モイーンダという二人組がいる。彼らはその名の通り，否定と肯定の役割である。テルミィは服を選ぶのだが，はじめに目についたのはお姫様のような服である。だが，スナッフに「それは君の本当の服かい」（80）ときかれる。「本当の服」という言葉はテルミィの意識の中に波紋を呼び，「突然，胸の奥からまぶしいほどに光輝く小さな子ども」（80）が飛び出して大声で「違う！」と叫ぶ。この子どもは後でスナッフを激情の中で殺した後にも登場するが，何であるかの解釈は難しい。とにかくここでテルミィは可愛い服への憧れをあきらめる。

次に翼のついた服を選ぶ。その服を着ると飛ぶことができるのだが，舞い上がりすぎて降りられなくなりかける。最後にテルミィが選んだのは実用的な目立たない服である。そのような服を選んだことでテルミィは得意な気持ちだったのだが，ソレデまでがやめたほうがいいと言う。

服を選んだテルミィはアェルミュラ，サェルミュラ，チェルミュラという三つの藩に向かう。そこの住人が竜の骨を持ち去ったのである。

現実の世界では，レイチェルがレベッカの思い出を語る。レイチェルはレベッカが戦争に行っているマーチンに超自然的な手段で会うために，裏庭の庭師としての力を使い，その歪みがレベッカに死をもたらしたと話す。ある明け方，レイチェルの枕元に立ったレベッカは，「一つ目の竜が死んだ。私は，死ぬけれども，死なない。私は待っている。」とつぶやく。急いでレ

ベッカの部屋に行ったレイチェルは，死の間際のレベッカが「……クォーツァスに……を灯して。」言うのを聞く。（102）レベッカの死を知ったマーチンは悲嘆に暮れる。このように戦争がもたらした多くの人の悲嘆があり，それが裏庭で照美／テルミィが向き合う「傷」とつながっている。

裏庭の方の物語ではテルミィたちは，コロウプに出会う。コロウプは人間ではなく，灰まみれのコロウプであるハイボウというのもいる。二人はコロウプから，アェルミュラでは異変が起こり，逃げ遅れたコロウプが片手を失ったことを聞く。コロウプは二人一組でいることが多いのだが，その手を失ったコロウプは，片割れを失った片子であった。彼は自分は手を失う前はナナシと呼ばれていたが，今はテナシと呼ばれており，名がないという名前より，はっきりどこがないという名前の方がいい（138）と言う。

必要なものがないという不在の問題は現実世界での照美の感情的問題の核心であった。裏庭は旅する人の内面と呼応するので，このテナシの存在はテルミィの問題を示しているともとれる。

テルミィたちが歩いて行くと，地中に棲むものが姿を見せる。テルミィは「気持ち悪い。何でこんなものが……」（146）と，不気味に黒光りしているミミズに対して本能的な恐怖を抱く。手で捕まえるスナッフにぞっとする。自分の内面の深い本能的な部分，そこには彼女の「傷」も存在するのだが，そうした領域に触れることへの嫌悪感が，この地中に棲むものに対する感情に含まれているように思える。

傷の拒否

照美は丈二おじいさんとバーンズ屋敷という二つの対象に対する喪失感に導かれて裏庭に来た少女である。照美の心には親に関心を持たれていないことからくる渇望もある。そうしたものは裏庭では具体的な「傷」という形でテルミィや裏庭の住人に現れてくる。なぜなら物語の最後の方で説明があるように裏庭はそこを旅するものの心を反映して変化する場所であり，一つ一つがその人に合わせた小世界のようなものなので，テルミィが旅することで裏庭は現実世界の照美の抱える問題を具現化するものとなるからだ。

はじめに訪れたアェルミュラで，テルミィは音読みの婆から竜の骨の解体がもたらした異変を聞く。アェルミュラの人々は欲のために竜の骨を持ち去り，骨から出たガスの影響で，傷を負うのを恐れるようになったという。婆は竜の骨から出たガスの本質を「他との接触」ができなくなることだと言う。人々は欲に任せた行動の結果として，傷を負うことを恐れ，お互いに触れあうことができなくなったのである。

人と交渉をもてば精神的に傷つくこともある。傷を負うことを完全に拒否するならば，人と関わることはできない。音読みの婆は竜の骨が運び込まれたときに鳴った礼砲を，「つなぎとめるものがなくなる兆し」（155）と読んだ。結局，アェルミュラの人々は「傷」を拒否し，お互い同士心をふれ合わせることができなくなったのである。

暴れる竜

現実世界でレイチェルがレベッカについて説明したように，音読みの婆もレベッカについて，竜の死が裏庭の世界に混乱をもたらしたこと，暴れる竜を鎮めた幻の王女は，竜の目玉を持って根の国へ行ったことなどを説明する。

この暴れる一つ目の竜とは，何を指すのだろうか。裏庭は世話をする人間の無意識的な領域とつながっている世界である。照美が家庭状況から来る渇望や激しい攻撃性を内に秘めているように，かつての庭師で幻の王女と呼ばれるレベッカの抱える感情が，竜の形となって裏庭の世界で育ち始めたのである。それは必ずしも悪い感情ではなかったはずだが，折悪しく戦争が起こってボーイフレンドのマーチンが傷ついた。裏庭の力を使ってマーチンに会いに行ったレベッカだが，それは力の乱用でもあったし，マーチンのことで混乱したレベッカの裏庭では育ち始めた一つ目の竜は暴れ始め，レベッカはそれを鎮めるために死んで根の国へ行かねばならなかった。レベッカも照美同様心に傷を負っており，テルミィの旅は彼女の傷とも関わってくる。

音読みの婆はテルミィが小さな礼砲を持っているという。照美の心の傷，特に純に関わるものを指すのだろうか。礼砲の意味は物語の中でいろいろな説明がされるのではっきりしないが，ともかく小さな礼砲を持つテルミィは根の国につながる回転ドアのような鏡面を回したときに吹き込む冷気を浴びても，裏庭の住人のように消えてしまわない。

この冷気もやはり，心の傷と関係しているように思う。不思議な生き物のようだと表現されているこの冷気は，テルミィが物心ついてからのありとあらゆる思いを嵐のように巻き起こしそうな，暴力的なすさまじい力を感じさせる。つまりテルミィ／照美が持っている感情，特に負の感情と関わりがありそうである。そ

うした「傷」に向き合うことが大切だということをいろいろな登場人物達が言うのだが，それを実行できるのはこの物語ではテルミィに限られる。根の国の風がテルミィにだけその破壊的効果をもたないのは，テルミィが「傷」と向き合う可能性を持つからだろう。

偽りの癒し

二番目に訪ねたチェルミュラでは，テルミィの服は血を流す服となる。テルミィ自身は怪我をしているわけではないのに，服が血を流す。それを見ていい子といって頭をなでるおばさんが現れる。なでられるといい気分だが，すぐに前にも増して服から血が流れる。テルミィはおばさんのところへ戻ろうとすると後ろめたい気分になる。「本来の君のありかたと違うものだからなんじゃないか」（173）スナッフは言う。

チェルミュラには癒し市場というものまである。偽善的な感じのする場所である。チェルミュラの音読みの婆は，「皆が傷をさらしているので，攻撃欲も萎えた代わりに，目に見えぬまやかしの癒しの菌の根がはびこって，かんじがらめになってしもうた」「本当に，癒そうと思うなら，決して傷に自分自身を支配させてはならぬ」（186）とテルミィに言う。

このエピソードでは，「傷」に対する表面的な対処が批判されている。アェルミュラで欲に駆られた人々が竜の骨を取ったことは，現在の現実の社会で経済万能の価値観に踊らされている人々を連想させてある意味リアルだが，ここでも安易な癒しの流行は，自己啓発セミナーなどの現実社会の事象を連想させる。

梨木香歩はエッセイ集『ぐるりのこと』の中で，中１の少年が幼児を殺害した事件に触れて，犯人の少年の異様性を強調するマスコミの報道の仕方は「社会に深い傷を負わせまいとするマスコミ流の「癒し」ででもあるかのよう」[1] とチェルミュラ同様の表面的な癒しが社会に存在することに触れている。この件に関して，関係筋が形式的なコメントを出すことについて，梨木香歩は「事件に本当に「関わっている」という感覚がない。」と書いている。

> 何だろう，このリアル感のなさは。全ての現象が皮膚の上をつるりと滑って行くような，乖離感は。まるでプラスチックのような，現実感の希薄な世界[2]。
>
> 我々が本来感じているはずの，我々個人個人が構成して成り立っている社会に対する深い痛みが，中世の魔女狩りのように乱暴に的を絞った異端の追い回しにすり替わっている。その方がより安易に精神の安定が確保できるからだろう[3]。

梨木香歩は『裏庭』でもこのエッセイ集でも，自分の感覚をよりどころにして「傷」と向き合う道を模索し，表面的でリアルな感覚を欠いた反応に対して，自分の感覚を頼りに事件が呼び起こした「つらさ」を語ろうとしている。

テルミィが行うことになる「傷」への関わりも，自分自身を相当深くえぐるものである。音読みの婆は「真の癒しは鋭い痛みを伴うものだ。さほど簡便に心地よいはずがない。」（189）と言う。

チェルミュラを出た後，川の氾濫を鎮めるための生贄としてハシヒメをたてたことが話題になる。コロウプは二人一組なので「一組のコロウプの絆の堅固さが，橋を確かなものにするように」（197）橋の両端に埋められた。川の氾濫とは竜が暴れることでもあり，裏庭の世界全体の規模での「傷」が問題になっていると見ることができる。それを抑えるのが一人の力ではなく，二人の絆であるという点が重要だと思われる。この物語では，イギリスと日本，老人と少女などの異種の二つの存在が結びつくことの重要性が，はじめから強調されているからだ。さいごにテルミィは自分の分身のような純の姿と向き合うのだが，これも二つの存在の絆が傷を乗り越えたというイメージの一例だろう。また，ハシヒメの話題と共にコロウプが雌雄同体であることも話題になるが，これも性別という異質性をまたいでいると言えるだろう。

マボロシの巣

テルミィ達の旅の途上で，ミズグモや開けてはいけない部屋など昔話のモチーフのようなものが現れる。テルミィは四つの部屋のあるマボロシの巣と説明された家に入るが，四番目の部屋にはいってはいけないと警告される。これは鶴女房や見るなの花座敷などの昔話を思わせる。案の定その部屋にはいったテルミィのタブー破りの結果ハイボウが消えてしなうのだが，このエピソードはむしろその手前の三番目の部屋のほうが重要である。

その部屋は，照美の家の居間そっくりだった。

> そこはテルミィの家の居間だった。パパもママもいない，いつもの寒々とした居間だ。純もなく，独りぼっちで話す人もない。（216）

テルミィの「傷」はこうした空気を持った家庭から生まれた。しかし，テルミィはそこに懐かしさや落ち着きを感じる。自分を苦しめてきた部屋に「共犯（なれあい）のような親しみ」（217）を覚えているかとも思う。また自分を育んだこの部屋がいやだったから丈二おじいちゃんの家へよく行くようになったのだが，それでもこの部屋が自分を育んだという事実は変えられないことに絶望的になる。「もう，どうしようもない……」（217）と感じたテルミィの中に「無力感と同時に，心の奥底で，抑えようのない破壊的な衝動が沸き起こる」（217）のである。テルミィの「傷」は，ここで激しい破壊性に達する。テルミィはそれを暴力的で自分にはなじまない衝動であると感じるが，これはくろみみずなどの地中に棲むものを嫌だと感じるのと同様に，自分の中にある嫌な部分から目をそらそうとする防衛の心の動きではないかと思う。

つづくサェルミュラの手前では，ハッカクモグラなどの地中に棲むものがまた現れる。真っ黒で艶があり，不気味な地の底に棲むものに，テルミィはぞっとする感じをもつ。裏庭というテルミィの内面と連動した世界の深部にいる存在を厭う気持ちは，自分の内面にある嫌なものから目をそらす心の動きである。テルミィは過去の記憶から喚起された怒りの感情にも，裏庭という世界の深部にある自身の感情の表れである生きものにも目を向けたがらないが，こうしたものが徐々にはっきり現れてきたということは，テルミィが「傷」と向き合う方向に進んでいるということであろう。

サェルミュラではテルミィはマボロシが残した黒い石片を岩山で拾う。それはあとで剣に変わり，テルミィの暴力的な面を増幅する。このマボロシは後に祖母の妙さんだとわかるので，テルミィは祖母の分の「傷」も共に持っていくわけである。

傷，試し，アイデンティティ

サェルミュラの音読みの婆は礼砲を『切り離すものがなくなる兆し』（237）と読んだ。一般的にいって，幼児は成長の過程で必要な分離というものを経てくる。これも幼児にとっての一種の「傷」である。それは自他の境界を築くために不可欠のものだ。サェルミュラでは「自他の境などないも同然になった」みんな溶け合って自分というものがなくなった（237）という。これはそうした必要な分離を拒み，幻想の融合状態にしがみつこうとするものだといえる。これも「傷」に対する正しい対し方とはいえないだろう。

テルミィは婆から職をもつものについて聞く。これはジブリのアニメ，『千と千尋の神隠し』のように，働くことの大切さを読者に伝えようとしているのだろうか。ソレデやカラダも『職』をもっているので他のコロウプと違うのだとテルミィは考える。音読みの三姉妹の婆はクォーツァスの大王樹に行くという試練を体験し，そこで響く礼砲は威嚇をあらわすと読んだ。彼女らはそこで職を持つものになった。

テナシは婆のところで一種の試練を経て銀の手を持つようになる。そして語り部としての職を持つものとなる。

職を持つとはどういうことだろうか。いわゆる就職するということではなかろう。自分が何者かというアイデンティティに関わる職であり，天職という考えに近いように思う。傷をもつことで成長するのと，試しを経ることで職を持つことは，内的な必然性から社会性が生まれるという点で似たようなプロセスのような気がする。

梨木香歩は『ぐるりのこと』の中で，個人が自分の意思で判断して行動することと，周囲に合わせて行動することの対比について掘り下げて考えている。たとえば薩摩藩で島津家が一向宗（浄土真宗）を数百年に渡って弾圧していたことを書いている。これは親鸞の教えが原始仏教に近いもので個人と法の関係を重視していたため，これを信仰すると藩が法に関わる余地がなくなるからだという[4]。裏庭という異世界の地理区分が「藩」と呼ばれているのは多少違和感があるのだが，後で書かれたこのエッセイから翻って考えると，薩摩藩などの江戸時代の藩が儒教倫理にもとづいて個人主義的行動倫理を排除したように，チェルミュラなどの藩でも住人が個人の感覚に従って行動することができなくなったことから，「藩」という名称が選ばれた可能性はあると思う。

さて，職を持つようになったテナシは，テルミィたちと共に旅はできない。なぜ職を持つと仲間が持てないのか？　ここでも『ぐるりのこと』を参照してみる。

梨木香歩が講演で不登校の子どもの話をした時，質疑応答で発言した人の言葉に今の子どもも大変だが「僕たちの頃は戦争中で，まず食うことが大変だった。」というものがあったという。それに対して梨木氏は，この「僕たちの頃」という言葉に「甘やかな連帯」があるのではないかと話した。その人はそれを認めたのだが，「どことなく誇らかな調子」のその「僕たち」という言い方に「宝物を見せるときのようなニュアンス」を感じ，それをすばらしい宝のようでうらやましくも思うが，それでは語れない孤独があることを梨木

氏はその場で語ったという。こうした言葉の細部の微妙な感じをキャッチして手がかりにしていく梨木香歩の手並みは見事である。

続いて梨木氏は「「群れ」にあるということ，それ自体が人を優越させ，安定させ，ときに麻薬のような万能感を生む。」というふうに，自分の感覚ではなく周囲に従う行動の退行的とも言える満足についての集団心理的な分析をしている。その満足は容易に「異分子を排除しようと痙攣を繰り返す」排他性へとつながる。したがって，右や左といった座標軸が思い浮かぶような文章，「自分が帰属している群れ」のことを意識して書かれた文章には，もう人を惹きつける力はないという[5)]。

職を持った銀の手がテルミィ達と離れて単独行動をとるのは，「語る」という職を持った以上は，何らかの群れに溶けいるような形ではなく，個人として自分の感覚を拠り所にして生きていく必要があるからではないか。『ぐるりのこと』で示された梨木氏の考えから考えると，そのように思える。

テルミィの怒りの爆発

サェルミュラを去ったテルミィとスナッフは話をする。スナッフはこの裏庭はレベッカのではなく君の裏庭であり，君の裏庭は君のもの（255）だと言う。

> 君は今この世界の主人公なんだよ。この世界の豊かさは生きている君にかかっているんだ。崩壊もね。帰ることが大事なんだ（256）

スナッフは別人のような冷笑を浮かべて，かつて英国から来た男の話をする。

その男は何としても裏庭に入りたかったので，自らの命を絶った。しかし，そうやって裏庭に来てみたものの，生きている人間が庭を自分のものに塗り替えながらでないと根の国は進めないと気づいたが，手遅れだった。そこで男はバーンズ屋敷の庭に来た幼い少年を池に引きずり込んだ。ぞっとするような醜い形相でスナッフはこのように語る。

スナッフが純のことを話していることに気づいたテルミィは，純を殺したのはあなたなのかとスナッフにきく。そうだと答えるスナッフにテルミィの怒りが爆発する。テルミィの気持ちの変化に呼応するように，持っていた黒い石片が細身の剣に変わり，服は鎧に変わる。そしてテルミィはスナッフにめちゃくちゃに斬りかかる。少し自制心を取り戻したテルミィは剣の暴走を止めようとするが，服が攻撃をやめない。スナッフは切り刻まれた肉塊になってしまう。（259）

テルミィはこれは服の魔力のせいだと思おうとするが，一瞬自分が激しい怒りを感じたことを認めざるを得ない。血の海に体を横たえ，服が真っ赤に染まったテルミィは，動かないスナッフを前にこの先どうすればいいか途方に暮れる。

スナッフを見ているうちに，テルミィは再び激しい怒りのほとばしりを感じる。すると胸の中から小さな子が飛び出し，スナッフの一部と融合し，鳩のような真っ白な鳥になって飛び去る。この小さな子は根の国の旅でタムという妖精のような男の子の姿になって，テルミィの道連れになる。スナッフの残りは真っ黒の気味の悪いカラスとなり，これも飛び去る。黒さは地中に住むもの同様，嫌悪を感じる自分の一部だと思われる。カラスはカラス天狗として，後でテルミィの分身として出てくる。つまり，テルミィの「傷」は三つの藩を旅するうちに次第にはっきりした形となり，スナッフの暴露に反応した怒りの炸裂によって極点に達した。それがカラスとなり，この先の根の国の旅では後を追ってくるひどく嫌な爬虫類のような姿の怪物になったのである。

７章の最後で，テルミィは「その服は殺人マシンで，スナッフも，テナシもなく，この見知らぬ世界にたった独りぼっちだとしても，テルミィには旅を続けるほか道はなかったのだった。」（261）という極度の喪失状況というべき状況におかれている。もっとも９章では，タムという妖精のような存在が出てきて旅の道連れになってくれる。

心の鎧

８章では現実世界のレイチェル達が，鎧の話をする。レイチェルは鎧にエネルギーをとられていたら，内側の自分は永久に変わらない（279）と言う。今までの生活や心持ちとは相容れない異質のものが，傷つける。その「傷つき」は異質なものを取り入れてなお生きようとするときの，自分自身の変化の準備と言えるのではないかというような話が交わされる。

これはテルミィの状況と重なる。スナッフの犯した罪がここでいう相容れない異質のものにあたる。スナッフに傷つけられたテルミィだが，お互いから飛び出した小さな者が融合して，根の国の旅の助けになっていく。これはテルミィの中に無意識のうちに「異質なものを取り入れてなお生きようとするときの変化の準備」が整っていることを示しているのだろう。８章の会話

は読者にそうした方向の読みを提示しているように思える。

根の国では空間自体がテルミィ／照美の内界と重なる部分が多くなっていく。そこでテルミィは今まで拒否してきた怒りや嫌悪を向ける対象と向き合っていく。

3　根の国の旅

根の国

取り残されたテルミィは先に進むうちに，いつのまにか出発点である貸衣装屋のカラダとソレデのところへもどっている。そこでテルミィはあなたがなりたいものは何かときかれ，本当の私になりたい，もう寄せ集めの自分なんかいやだ，「頭のてっぺんからつまさきまで，ぴっちり私になりきりたい。」（307）と言う。これも「フーアーユー？」と問いかけられて始まった裏庭の旅の目的であるアイデンティティの問題と関わる発言である。

また，真実というテーマについても語られる。カラダは「勇気と真実だけが，あんたをあんたにする」（307）と言う。それに対してテルミィは唯一の真実がないという不満を述べるが，カラダとソレデはいろいろある変容の中にいることを選ぶという。このような深い知恵に満ちた言葉をテルミィに与えてくれるカラダとソレデは，現実世界の丈二おじいちゃんを反映した存在であるらしいことが，最後に別れの時にテルミィが無意識のうちに「ありがとう，おじいちゃん」と言い，それに対して彼らが優しい笑顔で答えることから暗示される。

テルミィは戻ってきた鳩と根の国へ向かう。黒いシミのようなものが一緒に飛び込む。入り口は真っ暗で，見ているだけで吸い込まれていきそうな気がする。テルミィは足がすくむ。だが，鳩がしゃべりはじめ，小さな男の子の姿の妖精になって，自分はタムリン，タムとよばれてもいいと言う。このとぼけた妖精はスナッフを自らの手で殺してしまい，自分の攻撃性によって落ち込んでいる照美にとって，ありがたいものである。

根の国では地中に棲むものである，くろみみず，地いたち，ハッカクモグラが，それぞれテルミィに幻影（文中ではマボロシと表記されている）を見せる。そのマボロシはそれまでテルミィが自覚することを避けてきた自分の感情を刺激するものである。マボロシが消えると竜の骨が現れる。テルミィは服の傷口から出てくる金の砂を竜の骨に塗り，地中に住むものが燃えるというパターンが三度繰り返される。テルミィはこのようにして，自分が抱える「傷」を処置していくのである。自分だけではない。祖母の妙さんの傷や幻の王女であるレベッカ，さらにはマーチンの傷もこうして処置されていくのである。

友人への悪感情

はじめはくろみみずのテリトリーからである。歩いていくテルミィにくろみみずの声が聞こえてくる。裏庭で感じた黒いものへの嫌悪が，根の国ではもっと明確な声になって現れる。その声は友人の綾子の声で照美の悪口を言っていた。かわいそうに思って友達になってあげたのに丈二おじいさんと仲良くなってずうずうしいなどといった，現実の綾子があまり言いそうにないことが綾子の声で聞こえてくる。それを聞いて，テルミィは「胸の中に重い重い何かが流れ込んで」（316）くる。

テルミィはこれが現実の声だと確信しているわけではないが，それでも「頭の中に響いているのは確かに綾子の声だ」（316）ということがテルミィを傷つける。

裏庭，特に根の国はテルミィの内面が反映する世界であり，くろみみずなどの地中に棲むものたちは，テルミィの心にあって自分でも知覚することを拒絶している感情であるという点に，これまでもしばしば触れてきた。ここでもそうした裏庭の特性によって，ふだんは気づかないように切り離されている友人へのかすかな疑念，羨望，敵意などが増幅されて外側にある臭い，色，爬虫類のような怪物とその悪行などとして顕在化する。

テルミィは聞こえてきたくろみみず＝綾子＝実は自分の一面が発する声を聞き，「裏切られたような怒り」（317）を一瞬感じる。すると突然邪悪な臭いがしてくる。スナッフを殺したときにも，テルミィの内部にある怒りが服を鎧に変え，石を剣に変えた。この邪悪な臭いもテルミィの一瞬の怒りが，内面と呼応する外部に出現したと読める。テルミィは本能的で圧倒されるような恐怖を感じるが，これも自分に根を持つものへの反応と見ることができる。テルミィは一貫して，自分の「傷」の恐怖に知らず知らずさらされているのである。

邪悪な臭いの次にシューシューいう耳障りな音がしてきて，それは「殺傷能力のある摩擦音」（318）と表現されている。テルミィは眼の端に何か動くものをとらえるが，「見たくない，という気持ちと，確かめたい，という義務感にも好奇心にも似た気持ちが同時に動いた」とある。見たくないのは，繰り返しているよ

うに，自分の中にある嫌なものを避けようとしているのだが，同時に義務感とも好奇心ともいえる気持ちでそれに向き合っていこうとするところが，テルミィのスタンスをよく表している。テルミィは恐れながらも自分自身と向き合うことに義務と興味を感じているのだ。このようにテルミィの微細な感情の動きを梨木香歩の描写はうまくとらえ，表現している。

テルミィはついにそれを見るのだが，「それは巨大な蛇だった。」それを見た瞬間，「テルミィの背筋に冷たいものが走」り，ぬらりとした光り具合をおぞましく感じる。(318) 地中に棲むものへの嫌悪感と質的に近いが，はるかに大きなものである。

いくら逃げてもその蛇に見つかるのではないかという悪夢的な状況で逃げ惑ううちに，テルミィは幻覚らしきものを見る。

蛇は手足が生えてトカゲのようになり，照美をいつの間にか取り巻いていた大勢の知っている人（両親，綾子をはじめとする友人など）の首をロープで巻き，ぐっと引くと，彼らは「くえっ」と蛙のように鳴いて死ぬ。テルミィはショックを受けるが，そのショックには，ロープを引いたのは自分かもしれないという複雑な感情が混じっている。

> ……ぐいっと，引いた感触が掌に残っているような気がする。そして，その瞬間の，爽快感にも似た，すっとした気持ち。ドミノ倒しの最後の一押しのように，破滅的な快感。(320-321)

両親や友人に対する攻撃性を，テルミィはこのような形で意識にのぼらせる。それは「傷」と向き合う作業だが，そのことで自己嫌悪に陥ったテルミィは立ち上がるのも嫌になって，幻が消えた後の砂地にうつぶせになっている。テルミィはこのまま分解されて砂になれればどんなに清潔になれるだろうと考える。こうした自分を「悪」と見る気持ちの状態から，内部に蛍のような光を感じるのをきっかけに変化していく。テルミィは綾子がもし本当にあんな悪口をいっていたとしても，ずっと友達でいようと決める。すると，「いろいろな感情のうっせきが，堤防のほころびを見つけた濁流のように」噴き出す（322）という一種のカタルシスを得る。いつの間にか現れていた竜の骨に，自分の服の傷口から溢れ出ている金の砂を塗ると，くろみみずが燃える。

このように根の国のイメージは照美の中にある悪い感情とそれに対してテルミィの心が生み出す非言語的（蛍のような光）および言語的（友達でいようという決意）産出物を描いている。

癒されない渇望の世界

続いてテルミィとタムは地いたちのテリトリーにはいる。その途中でタムとの会話の中で，テルミィはふと，化け物はタムの光に惹かれてついてくるのではないかと考え，「慌ててテルミィは首を振った。」(326) タムとついてくる化け物が表裏一体であること，どちらもテルミィの内面にある感情とむすびついていることが後ではっきりするのだが，ここではテルミィはそれを見ないようにしている。

地いたちのテリトリーでは生臭い臭いがしてくる。テルミィが食事をとることを考えているときにこの臭いがしてきたのであり，そこから現実世界での両親の仕事であるレストランを思いだす。テルミィは「私はそこに入れない。役に立たないから。」(327) と考える。ここでのテルミィの連想のつながりは，仕事，追いかけてくる嫌なものなどの裏庭のテーマが，テルミィが自分をマイナスイメージでとらえているアダルトチルドレンであることとつながっていることを示している。

地いたちの見せる幻は餓鬼の世界である。全裸の亡者の群れがお互いに食い合っているという，地獄絵に例えられているかなりグロテスクな描写である。

テルミィは嫌悪感で動けなくなってしまうが，自分に近づいてきた餓鬼の目に限りない悲しみの影を認めて，その「決して満たされることのない，ひりつくような飢え」(330) に共感する。そして襲いかかってくる餓鬼を，自分でも不思議に思いながら受容する。

食われて崩れ落ちたテルミィは，追いかけてくる爬虫類の化け物がまた近づいてくるのを感じ，「身体中のとり肌が立」つ。(332) 癒されない渇望を抱えた他人には共感できたが，自分自身の内面とつながる嫌なものをテルミィは拒否しているのである。

動転してタムにすくいを求めるテルミィだが，遠くに見えていた朱色が全体を覆ったとたんに幻影は消える。そして竜の骨が現れてそれに金の砂を塗ると，地中に棲むものが燃えるというパターンが繰り返される。

浄化

根の国の最後に，テルミィはハッカクモグラのテリトリーにはいる。その手前で，タムは天使のように光輝いて見える。「地下に深く降りれば降りるほど，タムはピュアな美しさをたたえていく」(335) ようだと

テルミィは思う。一方，ついてくる爬虫類の怪物の方は，「前よりも，もっと醜悪で，しかも大きくなっている」（335）ように見える。これは根の国の地下というテルミィの心の深部では，テルミィが遠ざけておきたい嫌な感情が，良い感情からますますはっきり分離されていることを示しているのだと思う。タムはついてくる怪物に対して，ついてくるものは仕方がないととぼけたようなコメントをするが，それを聞くとテルミィはそうかもしれないと思う。タムの言葉はテルミィが「傷」に対して避けずに受けとめる助けになっているのである。

ハッカクモグラのテリトリーにはいるとタムが消えるが，テルミィは半ば予期していたような感じで「やっぱり」とため息をついて，比較的平静に受けとめる。これもテルミィが喪失に対する耐久力を増してきたことの証しである。

その場所には神々を思わせる彫像が並んでおり，その中でも抜きんでて神々しく美しい女性の姿をした一体が優雅に歩いてきて，テルミィの心に直接話しかける。ここにある彫像は，餓鬼の世界と砂の世界で数千年ずつかけて浄化されてできたものだという。その中にレベッカの彫像もあった。テルミィはそれまで思い出せなかったレベッカの名前を思い出し，「レベッカ！」と叫ぶ。美しい女性は，テルミィが竜の一つ目をもとに戻せばレベッカは解放されるが，そうすることは裏庭の崩壊につながると教えられる。いままで出会ったカラダやソレデなども滅んでしまうのだが，そうしなければ元の世界に戻れないという厳しい決断をテルミィは迫られることになる。

その女性の彫像は新しい世界の胞子をテルミィに見せてくれる。ドリアンのような果実を鱗状に覆っている一つ一つが新しい世界を宿している種なのだ。レベッカはこの裏庭に種を根付かせたが，根の国の呪縛にとらえられている。テルミィの根付きはもう始まっているとその人は言う。テルミィは「私の世界なんてないんです」（343）と言い，どこにも，と心の中で付け足す。

テルミィはこのように，自分がどこかに所属しているという実感をもてないでいる少女である。これは両親の役に立つことで関心をかろうじて保ってきたというこれまでの生活に根ざした感情である。

美しい女性は，これはレベッカの丹精した後を受けてテルミィのものとなり始めた裏庭であると説明し，心の深くに降りていって自分がどうしたいのかを自分に尋ねるようにアドバイスする。テルミィは「滑らかな湖の表面のよう」（344）な内面に潜り，浮上してきた時は一つの結論を携えていた。それは世界が崩壊しても，レベッカを解放してあげたいというものだった。そのためにテルミィはクォーツァスへ向かってさらに進むことになる。

4　クォーツァスへの道

退行的な湖

テルミィは澄んだ美しい湖にたどり着く。その場所は「澄んだ」「透徹した」「ガラス細工」などの表現に見られるように，現実離れした透明さが特徴になっている。彫像のあった場所は人間離れして凍りそうだと感じていたテルミィだが，「ここは皮膚が呼吸しやすい」（347）と思う。松の香に包まれてぷかりと浮かぶテルミィは，故郷に帰ったようだと感じる。これは子宮回帰的イメージだと言える。

テルミィは眠り，湖の底に沈む。そして，「水に溶けてしまったような夢」（347）を見る。そのように解体して漂っているような意識の中で，突然「ああ，これではまとまらない」（347）と訴えるものがどこかにあった。この部分も梨木香歩が主観的な体験を心の状態に注意しながら描写している箇所である。けっしてテルミィが考えたとは書かれていない。

ただよう意識のどこかからそのような声とも言えないような声がして，それをきっかけに「拡散していた意識が収れんして中央に寄って」（348）くる。そしてテルミィは浮かびあがる。浮かび上がると，水に溶けていたような意識状態とは違って，これまで裏庭を旅してきた恐ろしい体験が，リアルに思い出される。テルミィは「もう，ここから一歩も動きたくない」と考える。

> ――そうだ，私はここに属している。私はここから生まれて，そしてここに帰るんだ。やっと，たどり着いたんだ。もうどこへも行くものか。せっかくここを見つけたんだ。ここまでくるのにどんなに苦労したことか。（348）

こうしていることが一番平和で安定して幸せなのだ，もうここを出て行くまいとテルミィは決めるのだが，そう決めたとたん，根の国で追いかけてきた爬虫類の化物が来る。それを避けて深く潜るテルミィを怪物は追ってくる。

この湖のエピソードは，テルミィの心の中で生じて

いる退行して安楽にすごしたいという願望と，本当の自分を見つけるために「傷」と向かい合おうという二つの，どちらもテルミィのものである感情の葛藤をよく表している。

テルミィがおぞましく思う怪物は，今度はワニのような姿で黒い筋となってテルミィの気に入っていたきれいな湖に侵入し，ぞわぞわと感じるテルミィをどこまでも追いかけてくる。きれいだった森の木々が枯れていく。それを見てテルミィは「卑しい化け物」とつばを吐くように言う。テルミィは退行的な快楽をあきらめ，湖を出ざるをえない。彼女は怒りで目の前が真っ暗になる。このあたりの描写から，テルミィは追いかけてくる怪物に激しい攻撃性をぶつけていることがわかる。

負の感情の統合

テルミィの向かう先には暗い闇と穴のような通路がある。穴を見たテルミィはぞっとするが，タムの言葉に決意を固めて飛び込む。通路の中は深い縦穴になっていて，テルミィはウサギを追いかけて穴に飛び込んだ不思議の国のアリスのように，どこまでも落ちていく。「どのくらい落ちてる？」とタムに聞くと，その都度，百年，千年，一万年といった長大な単位の返事が返ってくる。テルミィが自分の手を見ると，皮膚が老人のようになっている。ほとんど骨のようになって根の国の最深部に向かうが，そこは金粉と粉雪が降ってくる幻想的な場所だった。

クォーツァスに行くには，今度は上へ昇るのだということをテルミィは直感的に悟る。テルミィはまたタムが消えているのに気がつくが，取り残されてうろたえたりはせず，自分で一歩一歩今できることに集中して進んでいくしかないのだという覚悟を持つことができる。(357-358) このあたりは，以前の貸衣装屋で迷っていた頃からずいぶん成長している。

テルミィは別の山に飛び移るために思い切ってジャンプするが，その時，服が貸衣装屋で試着した羽のついた服に変わっていることに気づく。これなら何とか上へ昇って行けそうだと考えたテルミィは，「つながってたって，つなげなきゃ意味ない」(360) と決意を新たにして，上へ向かって飛んでいく。

その途中で，体が重くなったように感じて下を見ると，道中何度も追いかけてきたあの嫌な感じのする蛇のようなワニのようなものが，こんどは醜悪なカラス天狗のような姿になって自分の体にしがみついているのを発見する。「いやらしい黄色い鱗」を見てテルミィは総毛立つ。奇怪なカラス天狗の顔をして不気味につや光りする黒い羽をもつ怪物に対し，テルミィ生理的な嫌悪感でいっぱいになり，聞こえてくるタムの声にもかかわらず落ち始める。

その時，タムを頼ろうと見上げるテルミィの目に，タムが困ったような顔をしているのが映る。タムが喋ったわけではないが，テルミィは彼の気持ちがわかったと思う。タムはこの化物を上に引き上げてほしいと思っているのだ，それがタムの願いの全てであり，彼の仕事なのだと理解する。とうてい耐えきれないと思っていたカラス天狗の醜悪さも，タムを経由してきた醜悪さなら平気だとテルミィは感じる。それは，タムへの親近感がカラス天狗の醜悪さを和らげてくれるからだろう。

裏庭の世界，とりわけ根の国は現実の照美の心の中を反映したような世界である。照美が現実で抱えきれないでいる感情，特に両親などに対する怒りの感情がさまざまな形で現れている。根の国に入る直前には，弟を殺した犯人だと判明したスナッフに対してその感情が爆発し，服が鎧に，石が剣に変化する。テルミィは鎧と剣に引きずられて自分でも殺戮をコントロールできなくなっていた。これはコフートがいう自己が機能しなくなった状態，自己愛憤怒の状態に対応する。テルミィが殺したスナッフとテルミィ自身から黒いものと白いものが飛び出して合体し，テルミィと一緒に根の国に来た。その一方がタムであり，もう一方がおそらくテルミィを負ってきた嫌な化物である。つまりこの両者は照美／テルミィの感情状態の両極を表すものである。

だから，テルミィがタムと化け物の間に相通じるものがある気がすると感じるのは自然な流れである。はじめはそのつながりを無意識のうちに否定していたテルミィは，両者が同じだということを受け入れ，「タム・リン」と呼びかける。ここで照美は自分で知覚することができなかった自分自身が持つ負の感情をとらえることができたのである。

クォーツァスでのイメージの変容

テルミィがとても良いものとひどく嫌なもののつながりを受容すると同時に「スパーク」が起こり，テルミィは目的地のクォーツァスにいる。相反するものの一致を受容することで，一番深い場所と一番高い場所という反対のものがつながったのである。クォーツアスとは，遠くからはそれが山の峰に見えるほどの巨大な桜の木だった。

テルミィがいるのはそこに開いた氷室のような洞窟の中で，テルミィは水晶の玉を握っている。(363) それが竜の一つ目であり，テルミィは「みんな一つのものだった」，それははじめからそばにあったのだと考える。この少し前から高いものと低いものが一つであるといった「反対物の一致」という神秘主義的な観念に近い内容がしばしばテルミィの口から出てくるが，この「みんな一つ」はその究極ともいうもので，さまざまに変化する裏庭の存在，そこにはスナッフや貸衣装屋のソレデやカラダ，３人のおばばやコロウプなど大勢が含まれるのだが，それらはすべて一から始まり一に帰るといった認識である。その一とは，まずはレベッカの内界であろう。同時に今では照美／テルミィが裏庭を旅することによって，それはテルミィの内界でもある。タムと嫌な化け物，その元であるスナッフや照美の心にある悪い感情を中心に展開する照美の内界が，結局竜の一つ目だったということになる。

テルミィが持っている竜の目を頭骨に嵌めると，３つの親王樹が動き出す。そこにある分割された竜の骨も一緒に浮かび上がってくるが，それを集めて一つにするにはどうすればいいか，テルミィにはわかった。彼女は「純！」と呼ぶ。これは照美／テルミィの内界の感情的なしこりの中心に位置するのが彼だからであろう。

この後，鮮やかで素早いイメージの変容が描かれる。一体となって元に戻った竜の骨は薔薇色に染まって透き通り，背中に亀裂が入ってそこからレベッカが現れる。「さなぎから蝶が生まれるように」(368) とあるように，これは変化と再生を強く印象づけるイメージである。手を振るレベッカはスナッフに変わる。これをテルミィは，彫像のある場所で女の人に言われたように，レベッカは解放されスナッフに会えたというふうに理解する。それに続いて，根の国の分裂が起こる。

裏庭の世界は，話に聞いていたストロベリー・キャンドルのような赤い光に包まれる。

> テルミィの心に刻まれていた，おじいちゃんの語り。その一つ一つが今，燃えるような光を放ってこの壮大な光景を創り上げている。
>
> ――大地が，挙手の礼を送っている。崩壊していく世界に。哀惜や，いたわりや，畏敬の念を込めて (369-370)

裏庭は照美の心と連動している世界であり，現実世界で照美が好きだった丈二おじいちゃんの語ったことがこのようなイメージとなって現れたという風に梨木香歩は書いている。テルミィは「礼砲とはそういう意味だった」，つまり上にあるように失われていく存在に対する複雑な喪の感情であると理解するのである。

崩れゆく裏庭のイメージの中でテルミィは意識を失う。気がつくと根の国の彫像のある場所にいた美しい女の人の声が，テルミィにレベッカもスナッフもハシヒメたちもみんな解放されたと言う。姿を見ると，裏庭でしばしばその幻影を眼にしたおかっぱ頭の女の子が成長した姿だった。彼女は実は照美の祖母の妙さんだった。そして照美によって救われるまでは餓鬼の世界にいたという。照美に食いついてきた餓鬼が妙さんだったのだ。

今は美しい女の人の姿である妙さんは，幻の王女とは実はレベッカではなくテルミィのことで，根の国から生きた少女を出すことが，つまり照美がこれから現実に戻って生きていくことが旅の目的だったのだと説明する。竜の骨を元に戻すことが出口であるというのは，そうすることで古いレベッカの裏庭が解体され，滅びるという意味だった。それは世界の滅びであり，同時に世界の誕生なのである。礼砲の音が再び聞こえてくるが，それは崩壊を促す音ではなく，再生の響きであった。

照美はチェルミュラで拾った黒い石が変化した剣，つまり妙さんの心の傷を妙さんに返す。それはきらきら輝く美しい宝玉になっていた。妙さんは，傷を美しく仕上げてくれたことに感謝の言葉を言う。妙さんは現実では苦しい暮らしの中で娘のさっちゃんを気遣う余裕も失っていた人物で，彼女なりの「傷」を持っていたわけである。テルミィの裏庭の旅は，妙さんのそうした傷をも癒す効果があったのだ。照美と名付けてくれと言い残した妙さんの思いはむくわれたのである。

妙さんの傷はテルミィのおかげで宝玉になった。とすると癒された「傷」の姿は玉で現されるのかもしれない。テルミィがクォーツァスで手にしていた竜の目玉も，この線で考えると，一言で言えばテルミィの「傷」の変容した姿であったわけだ。

妙さんはお別れの前にテルミィを二回ぎゅっと抱く。これはウィニコットのいう「ホールディング」(抱えること) にあたる。つまり愛情の渇望を抱えた照美／テルミィの心をこうして抱える仕草であり，また，「さっちゃんの分も」(376) といって抱いた二回目は，自分が母親として照美の母であるさっちゃんに愛情を注げなかった，それが照美の現在に影響しているような失敗も含めて，抱えようとしているのである。

テルミィは裏庭を去る前に，純とも再会する。テナシからもらった片子の珠を投げて虹の橋を渡っていくと，そこに純がいたのだが，かつての自分の記憶にあるような幼い純が見る間に成長して，テルミィと同じ背丈の，分身のような対になる。テルミィの意識の中で，純に関わる「傷」はこのような美しいイメージに変容した。

現実世界での変化

この後，自分をさがすお母さんのさっちゃんの呼び声を聞いて，テルミィは現実世界にもどる。さっちゃんも直感に導かれるようにしてバーンズ屋敷の鏡の前に立ち，そこで心の「傷」に翻弄された妙さん，照美，自分という三世代の顔が重なるようなイメージを見て，「照美！」と叫ぶのだ。三代の女性に共通する問題の所在を，梨木香歩はこのように描いている。

照美は戻ってくるが，さっちゃんの目にはそれが「今朝とは別人のようにぎらぎらとした目」（383）をしているように感じられて，後ずさりする。鏡から突然現れるという状況が常軌を逸しているからというだけではなく，「その子は，さっちゃんの知っている照美とはどこか違った」（383）とあるように，裏庭の旅がもたらした照美の変化，照美の内部の「傷」の変容を察知したのである。

母親が逃げ腰であるということに照美はわりと動じない。これはタムが消えても動じなくなった裏庭の体験が生きているといえる。しかし，それに続いて見知らぬ他人を見るような母の警戒する視線に出会って，「このひとは，私を怖がっている。」（384）と感じて見捨てられ感が再燃する。

しかし，さらに逆転が起こり，「自分と母親はまったく別個の人間なのだ」という照美に訪れた認識は，「何という寂しさ，けれど同時に何という清々しさ」（384）という感情的変化を生む。

> 私は，もう，パパやママの役に立つ必要はないんだ！
>
> それは照美の世界をまったく新しく塗り変えてしまうくらいの衝撃だった。なんで自分はあんなにパパやママのことばかり考えてきたのだろう。
>
> 「私は，もう，だれの役にも立たなくていいんだ」
>
> 全世界に向かって叫びたかった。（384）

裏庭でも役に立つことで関心を得ていたことをしばしば回想し，それが激しい怒りの感情にむすびついていた。ここで照美は両親と自分は別であるという自他の区別の認識を得て，役に立たねばという AC 的思考から脱出したのである。

このことを梨木香歩は植物のイメージで説明している。照美に訪れた別個の自分という認識は「クォーツァスから落ちていくときの感覚」を呼び覚ました。それは「柔らかい照美の心」に張り巡らされた「根を，力任せに抜いて，細いデリケートなひげ根をことごとく擦り切ったような痛み」で，「やがて回復するだろうという確信を，どこかに伴っている痛み」である。（385）

照美は裏庭のことを両親やレイチェルの前で話し，家族のタブーのようになってきた純の話題も臆せず口にできるようになっている。

両親と照美は帰り道でぎこちないながらお互いを抱え合う。はじめにさっちゃんが照美の肩を抱き，続いて父の徹夫がさっちゃんごと頭をぎゅっと抱く，その後で照美が妙さんの分だと言って，さっちゃんに抱きつく。その時，照美はさっちゃんの心臓の鼓動を感じた。母親を渇望していたさっちゃんの心を感じた照美は，その音を礼砲の音だ，「新しい国を創り出す，力強いエネルギーの，確実な響き」（393）だと思い，忘れずにおくことにする。

照美の心の中で起こった「傷」の変容は，現実の人間関係，特に家族関係にもこのような影響を与えたのである。

注

テキストは梨木香歩『裏庭』（新潮文庫，2001年）を使用した。引用のページ数は，この本からのものである。（単行本は1996年刊行）

1）梨木香歩『ぐるりのこと』p. 118（新潮文庫，2007年。単行本では2004年。「大地へ」）
2）同書，p. 116（「大地へ」）
3）同書，p. 120（「大地へ」）
4）同書，p. 164（「群れの境界から」）
5）同書，p. 176-178（「群れの境界から」）